

〔研究論文〕

心理教育プログラムを効果的に活用するための  
中学校若年教師への支援の事例

A Case Study To Support A Junior High School Youth Teacher  
To Implement Effectively A Psychological Educational Program

升 野 邦 江  
Kunie MASUNO

小 泉 令 三  
Reizo KOIZUMI

〔研究論文〕

## 心理教育プログラムを効果的に活用するための 中学校若年教師への支援の事例\*

A Case Study To Support A Junior High School Youth Teacher  
To Implement Effectively A Psychological Educational Program

升野 邦江  
Kunie MASUNO

小泉 令三  
Reizo KOIZUMI

福岡教育大学大学院  
教育学研究科教職実践専攻/  
新宮町立新宮中学校

福岡教育大学教職実践講座

(2013年1月31日受理)

本研究では、心理教育プログラムの取組が行われている中学校で、若年教師が心理教育プログラムを効果的に実践できるように、学校行事と関連づけて行うよう支援した。支援対象者の学級(第1学年)を実験学級とし、比較のために支援を行わない同学年1学級を統制学級とした。社会性と情動の学習 SEL-8S 学習プログラムの「積極的・貢献的な奉仕活動」の能力に重点をおいた学習を、学校行事と関連させて実践した。まず、学校行事に向けての行動レベルの目標を生徒に設定させ、その後2週間程度、帰りの会で目標に対する自己・相互の評価活動を行い、また担任が朝の会や学級通信で活動や評価の経過をフィードバックするように支援した。その結果、生徒の自己評定・教師の評定共に、SELの能力尺度の「積極的・貢献的な奉仕活動」において統制群よりも実験群の得点が有意に上昇した。以上の結果からこの取組は、若年教師にとって有効であることが示された。

キーワード：心理教育プログラム、効果的な活用、若年教師、社会性と情動の学習

### 問題と目的

学校教育現場では、児童生徒の社会性・人間関係形成能力を育成するために、様々な心理教育プログラムの取組が行われている。例えば構成的グループエンカウンター(国分・大関, 1999)、アサーショントレーニング(平木, 1993)、幼児期・児童期・思春期のそれぞれの段階における社会的スキル訓練(後藤・佐藤・高山, 2001; 飯田・石限, 2001; 岡村・田代, 2010)によって、向社会

的スキル(自己評定)が増加したり、仲間への認知の肯定的変化の促進や子ども相互の関わりが深まる効果が認められている。

しかし、心理教育プログラムを学校の教育活動に、どのように導入し効果的に活用していくかという調査研究は少ない。社会性と情動の学習(Social and Emotional Learning; 以下SEL)を提唱している小泉(2011)は、学習プログラムをどのように学校に導入し、定着発展させるかが課題であると指摘している。これは、SELの先進地アメリカにおいても同じである(イライアスら, 1999)。このように、社会性・人間関係形成能力の育成のためには、心理教育プログラムを導入し、効果的に展開していく方法を考えることは重要で

\* 本研究は、平成24年度特別経費(プロジェクト分)若年層教員キャリアモチベーション支援システム開発事業(大学の特性を活かした多様な学術機能の充実)の助成を受けた。

あるとされている。

但し、導入段階の取組・実践の工夫は報告され始めている。例えば、宮原・小泉(2009)は、SEL-8S学習プログラムを中学校に導入する段階での実践の効果検証を行っている。その中で、SEL-8S学習プログラムを学校行事と関連づけることで、プログラムの実施効果が社会的能力の自己評価低群に現れやすいことが示されている。また、学習した内容を日常生活で継続して指導することが課題であると述べられている。そこで、心理教育プログラムを導入している学校において、日常の教育活動に位置づけ、効果的に展開させていくための工夫を研究することが必要だと考えた。

特に、若年教師にとって、心理教育プログラムを効果的に活用することは、学級経営力(学級集団づくりの力)を伸ばす重要な機会となる。「若い教師のための教育実践の手引き」(福岡県教育庁教育振興部義務教育課, 2012)にも、学級担任には、「一人一人の子どもの能力、態度、人格の向上に結びつく指導・支援を行うこと。望ましい人間関係を作っていく学級集団づくりを工夫すること。」が求められている。しかし、「教員の資質向上方策の見直し及び教員免許更新制の効果検証に係る調査集計結果」(文部科学省, 2012)の中の校長の初任者教員に対する評価では、学習指導等の調査内容12項目のうち、集団指導の力の不足の割合が一番高い(やや不足している62.1%, 不足している7.5%)。すなわち、初任者にとって集団指導の力を身につけることは、最も難しいということが分かる。

この点に関し、心理教育プログラムが導入されている学校では、初任者や若年教師を含む全ての教師が学級集団づくりの力を高めることによって、児童生徒個々人の社会性・人間関係育成能力を土台にした人間関係づくり(集団づくり)を目的としている。そのような学校に在籍する若年教師は、心理教育プログラムを効果的に活用する力を身につけ伸ばすことが、集団づくりの力、すなわち学級経営力(学級集団づくりの力)につながる。

本研究では、こうした状況の学校において、若年教師が確実に学級経営力(学級集団づくりの力)を身につけるための効果的な支援方法を検討することを目的とした。若年教師の場合、ともすると学級集団への全体的な働きかけに終始してしまい、個々の生徒の取組への注意が希薄になりがちである。そこで支援のポイントは、まず①心理教育プログラムを単独では終わらせず、日常の学

校生活と関連づけて行うこと、次に②生徒に個人の役割を意識化させること、最後に③その役割の取組を日常化させることの3点について具体的指導法を身につけられるようにした。

## 方 法

### (1) 支援対象者

支援の対象となったのは、福岡県内の公立中学校1年生担任で、教職3年以内の教師であった。支援対象者とその学級の変容を明らかにするために、支援対象者の学級を実験学級(男子18名、女子17名)とし、比較のために支援を行わない同学年1学級を統制学級(男子18名、女子18名)とした。統制学級の担任は、教職20年以上の教師であった。

### (2) 取組実施時期及び手続き

20XX年10月～12月に、実態調査を含む取組を行った。学年主任の意を受けて第1筆者が若年教師の支援を行った。支援対象者の学校の状況は、2年前より各学年、年に6回、特別活動の時間に心理教育プログラム(構成的グループエンカウンター、ソーシャルスキルトレーニング)を取り入れていた。実施内容や実施時間などはカリキュラムに組み込まれていたが、プログラムの内容と日常の学校生活(学校行事、朝の会、帰りの会等)との関連に関しては、十分に検討されていない状況であった。特に若年教師にとっては、プログラムの教育的意義や使用方法に関して理解が難しい部分があった。そこで、支援対象者の心理教育プログラムの実施に向けての理解を深め、プログラムの有効活用によって、学級経営力(学級集団づくりの力)を伸ばすことができるように支援した。

20XX年9月中旬に事前実態調査、同年12月中旬に事後実態調査として、どちらも対人関係能力と学校環境適応に関する自己評定と教師の評定を行った。これらの事前・事後実態調査の間の2011年10月半ばに、次の項目に示すような支援を行った。

### (3) 支援の内容と評価

#### 支援の実際

心理教育プログラムの実践をより効果的に定着させるために、日常の学校生活(合唱コンクール、朝の会、帰りの会)と関連づけて授業実践を位置づけることを支援した。この中で、朝の会・帰りの

Table 1 学校行事・SEL-8S学習プログラム・朝の会、帰りの会での取組

時期	行事	指導の流れ	朝の会・帰りの会・放課後	実態調査・評価
9月 10月半ば		<p>・授業実践 積極的・質的な専任活動の能力育成 →行事に関して、学期の一日としての自覚をもち、自分の役割を果たし協力する力を育成 「学校でのミニボラ」 (SEL-8S学習プログラム一部改訂)</p>		<p>・生徒実態調査</p>
		<p>①合唱コンクールミニボラ宣言を記入</p>	<p>②ミニボラ宣言を鏡壇に掲示 空廊廊下で扉にも公開</p>	
			<p>③1週間 帰りの会 生徒相互評価 (合唱コンクールの取組ミニボラを頑張っている人)</p>	<p>・生徒相互評価 ・今回の取組と今後の学校生活に結びつける自己評価</p>
11月	合唱コンクール		<p>④朝の会 生徒相互評価を 教員がフィードバック</p>	
12月			<p>⑤相互評価活動を通廊扉前で公開</p>	<p>・生徒実態調査</p>

# ミニボラ宣言評価カード

合唱コンクールに対する自分のミニボラやクラスメイトのミニボラを評価しよう!

1年 組 番 氏名

10/15 (金)	練習の自己評価	(A B C) B C B C B C	理由	並ぶときにみんなに声をかけだし、練習中指揮者を見て大きな声で歌ったから。	先生印
	◎練習でミニボラを頑張っていた人とその様子を書こう	大野 さん	様子	ミニボラ宣言に書いていたようにリーダーを手伝っていた。	
( )	練習の自己評価	(A B C) B C B C B C	理由		先生印
	◎練習でミニボラを頑張っていた人とその様子を書こう		さん	様子	
( )	練習の自己評価	(A B C) B C B C B C	理由		先生印
	◎練習でミニボラを頑張っていた人とその様子を書こう		さん	様子	

Fig. 1 自己評価・相互評価カード

の会では、生徒に個人の役割を意識化させ、プログラム学習で獲得したスキルや情意面を強化・一般化するプロセスとして、生徒の評価活動を取り入れて実践するように助言した。

具体的には、対人関係能力と自尊感情の育成のための社会性と情動の学習 SEL-8S 学習プログラム(小泉・山田, 2011)の「積極的・貢献的な奉仕活動」の能力に重点をおいた学習「学校でのミニボラ」を導入した。「学校でのミニボラ」とは、学校のできるちょっとしたボランティアを意味する。一般的に、ボランティアとは、自発性・無償性・公益性に基づく活動を意味するが、ここでは、学校生活において、自分達にできる範囲で与えられた係の仕事を一生懸命やったり、工夫したりすることもボランティアだと拡大して捉えている。「学校でのミニボラ」で獲得した情意面の向上やスキルを行事の学級での取組(話し合い活動や合唱の練習の場面)に生かすことで、学級の一員としての誇りや自覚をもって、集団の中で積極的に自己を活かすことをねらいとした。

若年教師がこうしたねらいを達成できるように、次のような3点について支援を行った。まず、①心理教育プログラムを単独では終わらせず、日常の学校生活と関連づけて行うことができるように取組の流れを提示した(Table 1)。すなわち、プログラムの学習内容をその後2週間にわたって、どのように指導しつないでいくかを示した。

次に、生徒に個人の役割を意識化させるため②生徒に、行事での自分の役割を意識した目標設定をさせるようにした。ここでは、学校行事である合唱コンクールに向けて、学級の一員としてどんな役割でどのように活動するかを具体的な行動目標にして目標設定をさせるように支援した。また、生徒が評価しやすいように、設定した目標に回数や時期を記入させるよう支援した。設定させた目標に関しては、目標カードに記入し、学級の背面掲示板に掲示して、学級通信の1回目で、目標の内容を保護者などに提示するように助言した。この若年教師の従来の目標設定のやり方は、個別の目標は設定させていたが、抽象的な目標であり、学年相応の具体的なものではなかった。

支援の3点目は、役割の取組を日常化させるために、③2週間にわたり、目標に対する自己評価・相互評価(Fig 1)を行い、評価の内容を生徒や保護者にフィードバックすることであった。その結果、支援対象者は生徒に対しては、まず、合唱コンクールに向けての活動に対しての自己評価・相互評価を毎りの会で実施し、自己や他者の目標を意識化させた。更に、前日の自己評価・相

互評価の内容を次の日の朝の会や学級通信で、生徒にフィードバックすることで、プログラム内容の強化・一般化を図るようにした。朝の会のフィードバックの方法としては、自己評価をもとに個別の名前をあげて賞賛したり、それを認めているクラスの仲間の評価の適切さを具体的な氏名を挙げて紹介した。保護者に対しては、学級通信を3回発行し、1回目は自己目標を掲載し、2回目では、取組の経過を伝え、3回目は合唱コンクールの結果と生徒の感想を載せて発行した。

#### 対人関係能力測定のための尺度(自己評定)

「SELの8つの能力尺度」(宮崎他, 2004)を用いて、生徒の社会性を支える8つの能力26項目(虚偽尺度2項目を含む)の測定を、4件法(1~4で高いものほど、社会性が高いことを示す。)で行った。8つの能力とは、SEL-8S学習プログラムの基礎的社会的能力5つ(自己への気づき、他者への気づき、自己コントロール、対人関係、責任ある意思決定)と、応用的社会的能力3つ(生活上の問題防止スキル、人生の重要事態に対処する能力、積極的・貢献的な奉仕活動)を示す。

各生徒の下位尺度ごとに、得点の平均値を算出した(得点範囲: 1.0~4.0)。

#### 学校環境適応(自己評定)

「アセス(学校環境適応感尺度)」(栗原・井上, 2010)の生活満足度・対人適応の友人サポート・向社会的スキルの3つの下位尺度項目について測定を行った。15項目の測定を、あてはまる(5点)、ややあてはまる(4点)、どちらでもない(3点)、ややあてはまらない(2点)、あてはまらない(1点)の5件法で行った。

各生徒の下位尺度ごとに、得点の平均値を算出した(得点範囲: 1.0~5.0)。

#### 対人関係能力及び学校環境適応(教師評定)

生徒と同じ11の下位尺度について下位尺度ごとに1項目ずつ設定し、担任が5件法で評価した。各下位尺度の設定にあたっては、生徒用の尺度項目を具体的に参照しながら、評価の観点が統一されるようにした。以上の手続きにより教師による評定は、一人の子どもにつき、11個得られることとなった(得点範囲: 1~5)。

## 結 果

### 生徒の自己評定

生徒自己評定の2つの尺度の実験群と統制群の得点について、事前と事後の得点差を比較し、検定を行った(Table 2)。その結果SELの8つの能力尺度の「自己への気づき」「責任ある意思決定」

Table 2 評定及び検定の結果

	生徒自己評定の平均値とSD及び検定結果						教師評定の平均値とSD及び検定結果							
	実験群		統制群		Fの検定結果 F(3,df=68)	実験群		統制群		Fの検定結果 F(3,df=68)				
	事前	事後	差(SD)	事前		事後	差(SD)	事前	事後		差(SD)			
SELの8つの能力尺度	SD													
自己への気づき	3.50	3.75	0.15 (0.43)	3.56	3.31	-0.24 (0.56)	3.56*	2.86	3.13	0.27 (0.61)	2.83	3.21	0.38 (0.53)	0.86
他者への気づき	3.30	3.38	0.09 (0.40)	3.14	3.09	-0.05 (0.60)	1.15	2.74	3.32	0.58 (0.68)	3.23	3.52	0.29 (0.67)	1.88
自己のコントロール	2.86	2.92	0.07 (0.51)	2.91	2.81	-0.10 (0.59)	1.38	3.03	3.10	0.07 (0.54)	3.40	3.15	-0.25 (0.52)	3.56*
対人関係	2.97	3.15	0.18 (0.55)	3.08	3.11	0.03 (0.63)	1.33	2.89	3.35	0.67 (0.72)	3.11	3.35	0.24 (0.61)	3.00*
責任ある意思決定	3.04	3.19	0.15 (0.43)	3.01	2.94	-0.06 (0.48)	2.28*	3.2	3.18	-0.02 (0.51)	3.23	3.35	0.13 (0.73)	1.80
生活上の問題防止スキル	3.43	3.52	0.10 (0.54)	3.56	3.51	-0.06 (0.51)	1.40	2.51	2.74	0.22 (0.56)	2.83	2.85	0.02 (0.47)	2.19
人生の重要事象に対処する能力*	3.02	3.23	0.21 (0.51)	2.94	3.01	0.07 (0.55)	1.10	2.51	2.85	0.14 (0.49)	2.89	2.76	-0.08 (0.52)	0.83
積極的・貢献的な奉仕活動	3.16	3.30	0.14 (0.63)	3.21	3.03	-0.19 (0.51)	2.37*	3.29	3.88	0.40 (0.64)	3.23	3.25	0.02 (0.55)	2.73*
アセス項目														
生活満足度	3.40	3.60	0.50 (0.85)	3.77	3.59	-0.18 (0.95)	3.61*	3.03	3.52	0.49 (0.65)	3.03	3.15	0.13 (0.56)	2.41*
友人サポート	4.01	4.39	0.38 (0.77)	3.78	3.76	0.00 (1.02)	2.35*	2.86	3.30	0.44 (0.75)	3.23	3.35	0.13 (0.73)	2.53*
向社会的スキル	3.58	3.96	0.38 (0.59)	3.71	3.35	-0.36 (0.69)	4.55	2.91	3.21	0.30 (0.49)	2.69	2.76	0.08 (0.49)	1.84

\*p<.05

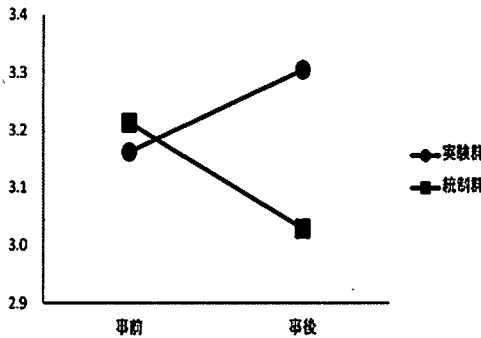


Fig. 2 生徒自己評定「積極的・貢献的な奉仕活動」

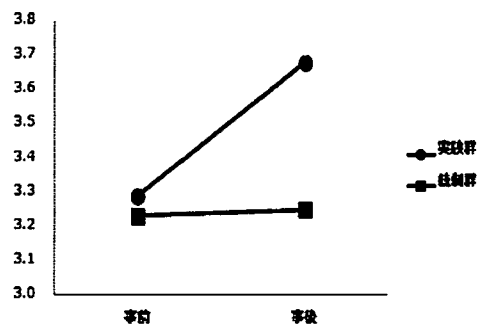


Fig. 3 教師評定「積極的・貢献的な奉仕活動」

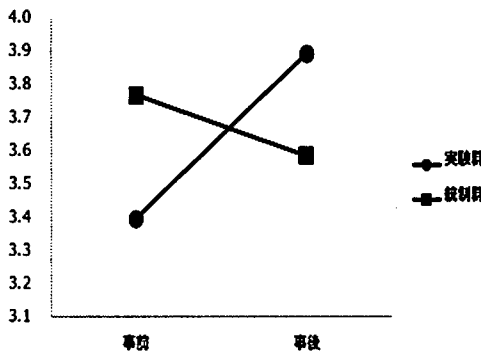


Fig. 4 生徒自己評定「生活満足度」

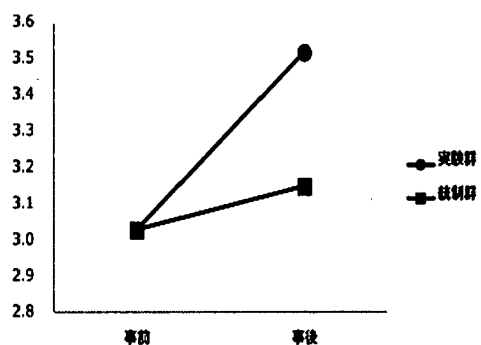


Fig. 5 教師評定「生活満足度」

「積極的・貢献的な奉仕活動」(Fig. 2)と、学校環境適応感尺度の「生活満足度」(Fig. 4)、「友人サポート」において統制群よりも実験群の得点が有意に上昇していた。

教師の評定

教師が評定した11の下位尺度についても、生徒自己評定と同様の検定を行った (Table 2)。その結果、SELの8つの能力尺度の「自己のコントロール」「対人関係」「積極的・貢献的な奉仕活動」(Fig. 3)及び、学校環境適応感尺度の「生活満足度」(Fig. 5)と「友人サポート」において統制群

よりも実験群の得点が有意に上昇していた。生徒の変容 (支援対象者の聞き取り)

生徒に、行事での自分の役割を意識した目標設定をさせて取り組ませるといった支援②について、「行動目標が具体的であったため、学級での行事の取組に生徒が熱心に取り組むことができた。」と話していた。

また、2週間にわたり、目標に対する自己評価・相互評価を行い、評価の内容を生徒や保護者にフィードバックするという支援③について、「目標設定の内容が具体的であったので、背面掲

示板に掲示してお互いの目標を常に確認でき、自分自身の振り返りや相互評価活動も容易にできた。相互評価の記名や理由を書く部分には、身近な友達の名前だけではなく、多くのクラスメイトの名前と行動内容を書くことができていた。自己評価に関しては、全ての生徒が振り返りの1週間程度で自己評価のAに達成し、その後は、自分たちで目標の記述内容の回数などを増やす積極的な取組と評価を行うまでになっていた。」と話していた。

これまでの体育会での取組との比較では、「今回の取組では、前回の取組と違い、自分たちの自発的な取組が行われた。それで、合唱コンクールでは、7学級の中で金賞を受賞することができた。自分たちの自発的な取組の成果が金賞につながったと生徒達も感じていたようである。」と捉えていた。なお、こうした生徒達の姿容は、その後の学習への自発的な取組や、係活動などの貢献的な活動へとつながっていったと支援対象者より報告を受けた。

#### 教師の姿容（支援対象者の聞き取り）

支援対象者は、支援①の心理教育プログラムを単独では終わらせず、日常の学校生活と関連づけて行うことができるようにするという支援の結果、プログラムの学習内容と日常の学校生活を関連づけ、合唱コンクールまでの見通しをもつことができたと言っていた。また、取組の中で、生徒達を叱責したのは1度だけであると話していた。その理由は、今回の生徒に目標設定をさせて取り組ませるという支援②と、目標に対する自己評価・相互評価活動を行わせるという支援③の活動に帰するとしていた。前回の行事（体育会）の取組でも、目標設定をさせたが、漠然とした目標設定（例：みんなで協力して頑張る、全員リレーで優勝できるように頑張る）であったため、生徒自身が何をどのように行動して良いのか分からず、教師がそのことを叱責するという繰り返しに終わっていたことに支援対象者は今回の取組から気づくことができた。また、評価カード（Fig 1）を活用して、生徒自身が自己を振り返ったり、他者を評価したりした。支援対象者は、そうした記述内容を見ることで、生徒の頑張りが良さが見え、今回の取組では、自然に叱責よりも賞賛の行動が増えたことに気づいていた。

## 考 察

今回の若年教師への支援を行った考察を支援①～③の視点から述べる。その後、SEL-8S学習プロ

グラムの効果について考察する。

支援対象者の聞き取りから、プログラム実践の取組の中で、学級会活動の時間だけで取り組むよりも、日常の学校生活の一部として、学校行事や朝の会・帰りの会と関連づけて取り組むことが生徒の姿容につながったと認識していることが確認できた。このことは、心理教育プログラムを単独では終わらせず、日常の学校生活と関連づけて行うことができるようにするという支援①の成果だと言える。

また、生徒に目標設定をさせて取り組ませるという支援②について、これがプログラムの学習内容の定着に結びつく手法であり、有効性を実感していた。その後、学級経営（学級集団づくり）にも活用したいという意欲の向上が見られた。すなわち、今回のミニボラの経験を生かし、2学期末までの新たなミニボラ宣言（目標）を生徒に作成させ、日常の生活と結びつけていた（Fig. 6）。このことは、生徒の毎日の自主学習の意欲にもつながったと担任教師は評価していた。

支援③に関して、自己評価・相互評価カードを生徒に帰りの会で記入させることで、生徒自身に自己や他者の目標を意識化させることができた。また、支援対象者が、評価カードの内容を学級通信や朝の会などで振り返ることにより、生徒の情意面の向上やスキルの定着を意識できるようになり、個々の生徒を理解する力がついたと考えられる。

生徒の姿容に目を向けると、今回は、「積極的・貢献的な奉仕活動」の能力に重点をおいた学習を行い、その社会性の能力が有意に向上していた。更に、スキル・情意面の強化のプロセスに朝の会や帰りの会で相互評価活動を取り入れたり、評価内容を朝の会の時間や学級通信などで学級にフィードバックしたりすることが、他の能力（「責任ある意思決定」）や学級適応感（「生活満足度」）、「友人サポート」の向上を促したと考える。こうした結果は、生徒自己評定と教師評定の両方に見られた。強化のプロセスの中で、生徒それぞれが、自分の役割に気づき、責任をもって行事に取り組み、集団での取組に対して満足した結果が得られたためであろう。

教師評定と自己評定の違いに関しては、生徒が個人の役割を意識して行動できる（「責任ある意思決定」）ようになった結果、教師には生徒が自分自身の行動をコントロールできるようになり（「自己のコントロール」）、役割を意識した周りへの関わり（「対人関係」）ができるようになったと見えたからだと考えられる。

最後に、本研究の目的である若年教師が確実に学級経営力（学級集団づくりの力）を身につけるための効果的な支援方法を検討することに関して述べる。小泉（2011）は、社会性と情動の学習（SEL-8S）の導入と実践の中で、「日常の学校生活は学級単位で行われており、教育効果を高めるためには学級経営は非常に重要である。学級の目標の重点や取組の柱に、SEL-8S 学習プログラムを

組み入れると、各学級担任の学級経営に大いに活かすことができる。」と述べている。すなわち、心理教育プログラムを日常の学校生活に関連づけて取り込むことで、学級経営（学級集団づくり）に活かすことができるとしている。また、生徒指導提要（2010）では、学級担任・ホームルーム担任が行う教育相談の新たな展開の中で、グループエンカウンター、ピア・サポート活動、ソーシャル

**2学期期末考査が終わりました**

11月22日（火）24日（木）に期末考査があり、次々とテストの結果が返ってきていることと思います。今回のテストでは、中間考査の反省から、計画表に沿ってしっかりと勉強できた人がたくさんいました。また、ただ教科書やノートを見るだけでなく、「自学ノートに書いて学習しよう」ということで、毎日5ページ以上の学習をしている人もいました。さて、テスト勉強の成果は出たでしょうか？計画表の前日の反省を見ても、「明日のテストは自信をもって頑張ります！」という感想がたくさんあって、うれしく思いました。何事も、しっかりと準備できていれば、自信をもって臨むことができるのです。これからも、努力を続けることができる人であってほしいと思います。

<テスト勉強で自学ノートに頑張った人！> 11/15チェック分～

MVPは **Hさん** 47.5ページ  
惜しくもMVPではなかったけれど30ページ以上勉強した人  
**Kさん Sさん Nさん Mさん Bさん**



**残りの2学期も有意義にすごそう！**

テストが終われば、あとはもう冬休みと通知表を待つばかり！とウキウキの人も多い事でしょう。しかし、そんな時ほど、もう一度、日々の自分を振り返り、目標をもって毎日を送ることが大切です。ここで、「ミニボラ宣言」を思い出し、自分のために、クラスのためにできることを頑張ろう！

- ・自分が何をすべきか考え、行動できるようにする。
- ・話すべきは話す。聞かされるは聞かされるというように仕度をつける。
- ・朝早く来て机や身の回りをきれいにする。
- ・体育委員として、体操服忘れがないように呼ばれる。
- ・学習委員として、チャイム席や私話がないように呼ばれるとする。
- ・授業と休み時間の仕度をつける。
- ・帰りの傘下毎日呼ばれる。
- ・保健委員なので、始食時間にみんなに呼ばれるとする。
- ・困っている人がいたら、自分から声をかけて手伝う。
- ・試合があるときに、毎回先生に聞き、後ろの生徒に叫ぶ。
- ・やれることは自分でやって、困っている人には声をかける。
- ・委員会の仕事は必ずやって頑張る。
- ・チャイム席の呼びかけや号令と毎時間、できるだけ大声ですする。
- ・静かに話と聞き。
- ・チャイム席を守る。
- ・係の仕事に責任ととら、自分から行動する。
- ・授業態度と良くする。
- ・先生の話をしっかり聞き。
- ・チャイム席を守る。
- ・委員会の常時活動と毎日しっかり行う。
- ・自分から話と聞き、私話をやめる。
- ・毎時間先生の話を最後までちゃんと聞き。
- ・係の仕事とちゃんとやる。
- ・チャイム席を守る。
- ・ちゃんと毎時間チャイム席を守る。
- ・静かに掃除とする。
- ・周りがあつたときと聞いたときと分かるようにとたたくさんする。
- ・大声で声であいざつとする。
- ・チャイム席を守る。
- ・チャイム席を守る。
- ・困って仲の良いクラスにするために、自分のできることを頑張る。進んで行動する。（発表・挨拶・掃除・チャイム席）
- ・困っている人と助ける。声をかける。
- ・図書委員として、みんなに楽しく本と読んでもらうようにする。
- ・周りの人が授業中、いじわるとされていたら注意する。（いじわるを止めるなど）

こうやっておると、確かに実行出来ている人も沢山います。出来ていない人はこれから頑張ろう！！

Fig. 6 学級全員のミニボラ宣言（学級通信より）



スキルトレーニングなどの心理教育プログラムが挙げられ、これらは生徒指導の手法であり、実施にあたっては工夫が求められると記されている。これらのことから、若年教師が、確実に学級経営力（学級集団づくりの力）を身につけるために、日常の学校生活と関連づけて、心理教育プログラムを学級経営に取り入れる力を養うことは、学級経営に大きな影響を及ぼすと考えられる。

なお、導入後の取組においては、小泉（2011）は、社会性と情動の学習（SEL-8S）の導入と実践の中で、「年間計画作成・校内研修会・校内の組織づくり」の必要性を述べている。また、生徒指導資料集第3集規範意識をはぐくむ生徒指導体制（国立教育政策研究所発行、2008）の中で、「より組織的で効率的かつ機動的な生徒指導が行えるよう、組織マネジメントの観点から学校運営の改善を図る必要がある。」とされ、マネジメントの方法として、計画・実践・評価・改善のサイクルが示されている。心理教育プログラムの効果的な活用が、学級経営で悩む若年教師の学級経営力（学級集団づくりの力）の改善につながるのであれば、今後、若年教師が増えてくる学校現場に、組織的・計画的に心理教育プログラムを導入し活用することが必要であると考えられる。

### 引用文献

- 福岡県教育庁教育振興部義務教育課 2012 若い教師のための教育実践の手引き
- 後藤吉道・佐藤正二・高山巖 2001 児童に対する集団社会的スキル訓練の効果カウンセリング研究, 34, 127-135.
- 平木典子 1993 アサーション・トレーニング—さわやかな自己表現のために— 日本・精神技術研究所
- 飯田順子・石隈利紀 2001 中学校における学級集団を対象としたスキルトレーニング—自己効力感がスキル学習に与える影響— 筑波大学心理学研究, 23, 179-185.
- イライアス M. J. 他 小泉令三（編訳）2007 社会性と感情の教育—教育者のためのガイドライン39— 北大路書房.
- 小泉令三 2011 社会性と情動の学習（SEL-8S）の導入と実践 ミネルヴァ書房
- 栗原慎二・井上弥 2010 学校環境適応尺度「アセス」ほんの森社
- 国分康孝・大関健道 1999 エンカウンターで学級が変わる 図書文化社
- 国立教育政策研究所 生徒指導研究センター 2008 生徒指導資料集第3集 規範意識をはぐくむ生徒指導体制
- 文部科学省 2012 教員の資質向上方策の見直し及び教員免許更新制の効果検証に係る調査集計結果
- 宮崎晃子・田中芳幸・津田 彰・小泉令三 2005 中学生版「社会性と情動（SEL）」尺度の開発 第7回子どもの心・体と環境を考える会学術大会（日本子ども健康科学研究会）, 28.
- 宮原紀子・小泉令三 2009 中学校の学校行事と関連づけた社会性と対人関係能力の向上—社会性と情動の学習（SEL）プログラムの活用による試行的実践— 教育実践研究（福岡教育大学教育学部附属教育実践センター）, 17, 143-150.
- 宮崎晃子・田中芳幸・入慶田本早・津田彰・小泉令三 2004 社会性と情動（SEL）尺度の開発 子どもの心・体と環境を考える会学術大会紀要（日本子ども健康科学研究会）, 53
- 文部科学省 2010 生徒指導提要
- 文部科学省 2012 教員の資質向上方策の見直し及び教員免許更新制の効果検証に係る調査集計結果
- 岡村寿代・田代祥子 2010 幼児の集団社会的スキル訓練の効果に関する研究—攻撃行動の低減を目指した介入— 発達心理臨床研究, 16, 1-9.

### 謝 辞

本研究をまとめるにあたり、機会を提供し協力していただいた多くの関係機関の皆様、先生方に心より感謝申し上げます。